

李 劍 鋒

陶淵明「閑情の賦」の歴代における受容と解釈

田 云明・三野豊浩（共訳）

解題

- 本稿は、李劍鋒氏の論文「陶淵明《閑情賦》的历代接受与阐释」の翻訳である。原著者の李氏は中国の山東大学文学院教授で、同論文は『中国人民大学学报』第35巻、2021年第1期の155～164頁に掲載された。
- 内容は、六朝時代の田園詩人・隠逸詩人として知られる陶淵明の「閑情の賦」に関するものである。「閑情の賦」は男女の情愛を大胆かつ赤裸々に表現した問題作であり、「高潔な隠者」という作者の一般的なイメージとはかけ離れていることから、『文選』の編者である蕭統以来、歴代の文人たちの議論の的となって来た。本稿は、その受容と解釈の変遷を、六朝・唐宋・金元・明清さらには近代と時代を追って紹介し、それぞれの時代の特色と傾向を分析するものである。そして最後は、過去の解釈の限界と今後に残された課題を提示して結ばれている。
- 本稿は本学文学部の三野豊浩と田云明氏との共訳による。田氏は唐山師範学院外国語学院日本語科の准教授で、陶淵明に造詣が深い。まず発起人の田氏が本稿の草案を作成し、次に三野がこれに加筆修正し、田氏との度重なる討議の末に完成に漕ぎ着けたものである。
- 原著は各頁の下に注があるが、本稿はこれを末尾にまとめた上で通し番号とした。
- 専門外の読者の目にも触れる可能性を考慮し、ルビを通常よりやや多めに施した。

陶淵明〔365-427〕の「閑情の賦」は〔扇情的な表現によって〕色情を誇張するものではなく、彼の人生の理想を託したものであり、その内容と含意は極めて豊富である。しかし過去のそれに対する解釈は、蘇軾〔1036-1101〕以前は主にこの賦の色情的な部分〔の受容〕に偏っており、蘇軾以後、読者は〔ようやく〕その背後に隠された理想と意味を探究するようになった。それが古典作品となって行った過程は、深く探究する価値がある。古典作品の意義は、特定の個人や特定の世代の読者がすべてを完成できるものではなく、多くの読者と歴代の読者の読解の中でその意義の〔さまざま〕側面が絶えず現れて来るものである。これらの側面に対して比較検討・取捨選択・整理統合を行うことは、現代の読者が古典作品を理性的に解釈する上での学術的な前提である。「閑情の賦」は同類の作品の中で最も古典的な〔価値の高い〕ものであり、歴代の読者の関心を集め、さまざまな解釈が次々に出されて来た。学者たちは〔この作品に〕関心を持っているものの¹⁾、資料の使用の上では基本的に『陶淵明資料彙編』〔中華書局〕に限られており、今日まで系統的かつ詳細な整理がなされていない。このため、それに対する現代の解釈には豊富な学術的蓄積が欠けており、論者が空をつかむような議論を発することは避け難い。それゆえ、資料を十分に網羅した上でその受容・解釈史の輪郭を描くことは、依然として必要かつ興味深い文学史の話題なのである。

一、蕭統の「卒に諷諫無し」論

ハンス・ロベルト・ヤウス〔Hans Robert Jauss, 1921-1997, ドイツの文学理論家〕は彼の受容理論を解説する際、「第一読者」という概念を提起した。第一読者とは、文字通り「最初にその作品を読んだ読者」という意味ではなく、「その独特な見解と鋭い解釈で作者や作品のために受容史を創始し、受容の基礎を築き、さらには受容の方向を導く、特別な読者を指す²⁾」。そして「第一読者の理解は一代また一代という受容の流れにおいて充実され豊かにされる。ある作品の歴史的な意義はこの過程の中で確定され、その審美的価値もこの過程の中で実証される」のである³⁾。

陶淵明「閑情の賦」の第一読者は、疑いなく、彼の死から百年後の蕭統〔501-531, 南朝梁・昭明太子。『文選』の編者〕である。蕭統以前、歴史は我々に「閑情の賦」の読解に関するただの一言さえ残してくれなかった。蕭統はその「陶淵明集の序」において陶淵明の文をその人柄のように高く評価した後、筆先を転じ、残念そうに次のように続けた。

白璧の微瑕〔玉に瑕〕は、惟だ「閑情」の一賦に在るのみ。揚雄の所謂「百を勧めて一を諷する」者なり。卒に諷諫無ければ、何ぞ必ずしもその筆端を揺るがさん。惜しいかな、是れ無ければ可なり。⁴⁾

では、陶淵明の人柄とその詩文を深く愛する蕭統は、なぜ「閑情の賦」を否定したのだろうか。

まず、これは蕭統が儒家思想に強く影響された読者であることと切り離せない。日本近代の学者橋川時雄〔1894-1982〕の『陶集版本源流考』によると、彼の見た旧写本『陶淵明集』に添付された「陶淵明集序」の文末には「梁大通丁未年夏季六月 昭明太子蕭統撰」と記されている⁵⁾。梁の大通元年丁未の年は西暦527年で、陶淵明死去の427年からちょうど百年後である。この年蕭統は27歳で、六月には母の丁貴嬪が〔前年末に〕亡くなってからまだ七箇月しか経っていなかった。蕭統はもともと極めて親孝行なので、母が重病の時には「朝夕病に侍し、衣帯を解かず」、母が亡くなった後、悲しみのあまり「水漿口に入らず」、〔父の〕梁の武帝〔蕭衍 464-549〕に何度も叱責されてやっと「日に麦粥一升を進め」、「菜果の味を嘗めず。体は素より壯にして、腰帯は十圍なるも、是に至りて過半を減削す」という有様であった⁶⁾。曹道衡氏はこれに基づき、これは仁孝の本性〔による行為〕だけでなく、儒家の礼儀制度の要求を満たす行為でもあると分析し、「これは実に、『礼記・喪大記』の「君の喪には、子・大夫・公子・衆士はみな三日食わず」「子・大夫・公子・衆士は粥を食う」という規定を履行したものである」と述べる⁷⁾。蕭統は父に従って仏教を信仰したものの、その仁孝の本性から見れば、むしろ儒家の思想と規範に従う傾向がより強い。〔曹道衡氏によれば〕彼は「様々な享樂にあまり興味がなかった⁸⁾」。『梁書・昭明太子伝』によると、彼は「宮を出て二十余年、声樂を蓄えず。少き時、勅にて太楽の女妓一部を賜るも、略好む所に非ず⁹⁾」であった。妓女たちの奏でる管弦の音楽よりも、むしろそれ以外の山水の清音を好んだ。要するに、蕭統は名利に淡泊で誠実な、儒家の規範を真面目に履行する読者であり、儒家の倫理道徳に反する言動に対しては一種の警戒感と批判的な態度を有していた。彼が艶情豊かな「閑情の賦」を陶淵明の詩文中の「白璧の微瑕〔玉に瑕〕」であると批判したのも、不思議ではない。

次に、蕭統が陶淵明の「閑情の賦」を否定したのは、この賦が人間と神との恋愛を世俗の男女の恋愛に移したことと関係がある。興味深いことに、蕭統は前漢・揚雄〔前53-後18〕が漢代の賦を「百を勧めて一を諷す〔贅沢を勧める言葉は百もあるが、それを諷める言葉は一つしかない〕」と批判する言葉を借りて「閑情の賦」を「卒に諷諫無し」と批判したが、彼を中心に編纂された『文選』は唐突に揚雄の「羽獵の賦」「長楊の賦」を収録し、また前漢・司馬相如〔前179-前117〕の「子虚の賦」「上林の賦」をも収録している。これらの賦は明らかに「百を勧めて一を諷す」という作品であり、結末に諫言する所があるものの、それは賦の主体に比べ「百分の一」であることは否めない。蕭統の艶情に対する態度は、狩獵に対する態度よりずっと厳しかったようである。たとえ「閑情の賦」が「情に発し、礼義に止まる」としても、主要な部分の感情表現が極めて強烈で濃厚であったため、否

定されたのである。注目すべきは、『文選』にはまた「情」賦の一類があり、戦国楚・宋玉〔生卒年未詳〕の「高唐の賦」「神女の賦」「登徒子好色の賦」と三国魏・曹植〔192-232〕の「洛神の賦」が堂々と収録されていることである。しかも、宋玉の三つの賦には男女の情愛を暗示する表現がかなりある。では、蕭統はなぜ陶淵明の「閑情の賦」だけに厳しいのであろうか。原因は主に次の通りである。情愛をうたう賦の内容と表現の傾向から見れば、『文選』に選ばれた「高唐の賦」など四つの賦のうち三つが人間と神との恋愛を描くものであり、俗世の人間の恋愛〔を描くもの〕ではなく、もともと特別な文化的伝統があり、人々に受け入れられやすい。残る「登徒子好色の賦」は男女の情愛を描くものではあるが、全編を通して色を好まないことを唱え、直接的な誘発力・衝撃力を有しない。だから、これらの内容と男女の情愛の謳歌は人間の理性を失わせることができない。これが原因の第一である。第二に、単に男女の熱愛を扱う類似作品はみな「閑情の賦」と同様に落選の憂き目を見ている。たとえば後漢・張衡〔78-139〕の「定情の賦」、蔡邕〔132/133-192〕の「檢逸の賦」「静情の賦」、陳琳〔?-217〕の「止欲の賦」、阮瑀〔?-212〕の「止欲の賦」、王粲〔177-217〕の「閑邪の賦」、応瑒〔?-217〕の「正情の賦」などはいずれも『文選』に選ばれていない。そのうち張衡の「定情の賦」と蔡邕の「静情の賦」は、陶淵明の「閑情の賦序」で特に言及された二種である。これらの共通の特徴は「始めは則ち蕩かすに思慮を以てし、而して終に閑正に帰す」〔「閑情の賦序」〕ということである。作者自身は「將に以て流宕の邪心を抑え、諒に諷諫に助け有らんとす」〔同上〕と考えているが、蕭統はどうしても認めなかった。これは、このような種類の賦が直接世間の男女の熱愛の心理をかき立てることと切り離せない。

さらに、蕭統は陶淵明を敬慕するあまり、「陶に望むに聖賢を以てす」といった風ですらあり、聖賢に似合わない「好色」な言動を望まなかった¹⁰⁾。だから陶淵明に苛酷な期待をすることは免れない。これは蕭統撰「陶淵明集序」の全編を貫く賛辞、蕭統撰「陶淵明伝」で南朝梁・沈約〔441-513〕の『宋書・陶潜伝』に記された「潜弱年薄官にして、去就の跡を潔しとせず」に触れなかったことなどから見て取れるので、ここでは贅言しない。

蕭統の陶淵明「閑情の賦」に対する厳しい批判的な態度は、その後世の受容に対し、解釈の多面的な可能性に富んだ道徳的な評価と審美鑑賞上の基礎および参照を提供した。蕭統は『文選』では「閑情の賦」を除外したものの、彼が編纂した八巻本『陶淵明集』ではそれを保存した。このことは、後世の読者の受容に貴重な文献の拠り所を提供した。唐初の『芸文類聚』『初学記』などの類書がこの賦を全く引用しなかった事実から見れば、その貢献はより一層称賛に値するであろう。

二、唐宋の読者の愛好と蘇軾の「色を好むも淫ならず」論

蕭統の否定的な態度は、唐宋金元の読者の「閑情の賦」に対する承認・愛好・模倣に影響を及ぼさなかった。唐人には陶淵明の「閑情の賦」を直接批判する言論はなく、それどころか一貫して閲読し愛好していた。詩文の創作において、作家はよく詠物・人物描写の際に巧みに「閑情の賦」の趣向を用い、愛好の情を表している。たとえば司空圖〔837-908〕の「白菊」三首其一は「疑わず陶令は是れ狂生なるを、賦を作りては其れ定情有るが如し」とうたい、陶淵明の典故を借りて菊への愛好を記している¹¹⁾。明・鍾惺〔1574-1624〕は初唐・劉希夷〔651-679〕「公子行」の「願わくは輕羅と作りて細腰に着し、願わくは明鏡と為りて嬌面を分かつたん」を「情中の妙語なり。然れども陶公の「閑情の賦」の語より討出す」と評している¹²⁾。崔懷宝〔649-728〕の「憶江南・平生願」は「平生の願ひ、願わくは楽中の箏と作らん。玉人の織手子に近づくを得て、研羅の裙上に嬌声を放たん。便ち死すとも也た榮と為さん」とうたう¹³⁾。李徳裕〔787-850〕の「鴛鴦篇」は「願わくは鴛鴦の被と作り、長く有情の人を覆わん」とうたう¹⁴⁾。〔これらはみな〕恋情を表現しているが、主語が男性か女性かに関係なく、多少なりとも艶情に染め上げられており、いずれも陶淵明の賦の情趣がある。これらは氷山の一角であるとしても、当時の人々の読書の興味の一端が見て取れる。

これについて、晩唐の一部の作家は創作で「閑情の賦」を受容する際、艶麗な趣味に対する興味関心が旺盛であった。これは陶淵明「閑情の賦」の受容史における新たな現象である。例えば、段成式〔803?-863?〕の「飛卿〔温庭筠の字〕を嘲る七首」は「知る君の「閑情の賦」を作らんと欲するを、応に願うべし身を將ちて錦鞋と作さんと」とうたう¹⁵⁾。詩を作り友人を好意的にからかうのは当時の詩人たちの風潮であった。例えば、段成式はある宴會に参加するために「速やかに馳騁を罷め、坐して花艶を觀れば、或いは眼飽の嘲り有らん」とうたった¹⁶⁾。周繇〔841-912〕は「段成式を嘲る」という一首を作り、〔段成式を〕からかって「情を恣にし窈窕〔美女〕を窺う」とうたった¹⁷⁾。それゆえ、段成式は「周繇の嘲らるるに和す」という一首を返礼として贈った。段成式はまたかつて「為憲〔周繇の字〕が妓人と戯れた」ため、「元中丞を嘲る」詩を作ったことがある¹⁸⁾。当時の人々が詩を作りからかいあったことの一端が見て取れる。温庭筠〔817?-866?〕は段成式の詩友で、一緒に妓女遊びをした可能性さえある。段成式の『西陽雜俎』巻二には「坐客」とともに「諸妓」と遊んだ記録があり、それゆえ二人が言葉を交わすのはいつも気ままで親しげであった。「飛卿を嘲る七首」はまさに段成式が、温庭筠が酒に酔ってなじみの妓女に戯れた際のおかしな言動をからかうために、わざとその言葉を誇張している。すなわち、温庭筠は愛する妓女のために陶淵明を学んで「閑情の賦」を作ろうとしている。そして温庭筠は陶淵

明と同じように「願わくは糸に在りては履と為り、素足に附きて以て周旋せん¹⁹⁾」(「閑情の賦」という心情なのであろう、と推測している。温庭筠が「閑情の賦」を作らんと欲したのは事実なのかも知れないし、また段成式がことさらからかった言葉なのかも知れない。

現存する温庭筠の詩文を調べてみたところ、「閑情の賦」は見つからなかったものの、「錦鞋の賦」があった。この賦は、その情趣の健全さといい、芸術上の完璧さといい、陶淵明の「閑情の賦」と同列に論じることは難しい。しかし疑う余地もなく陶淵明の賦の「願わくは糸に在りては履と為り、素足に附きて以て周旋せん」を発想の原点とし、結びの所で陶淵明の賦の原文の形式と趣を活かして「願わくは芳趾に綢繆とし、周旋を綺楹に附せん。悲しむ莫かれ更衣床前に棄てらるるを、側かたわらに聴く東晞佩玉とうきはいぎよくの声」とうたっている²⁰⁾。賦全体には文人の理想の高揚がなく、艶情の描写と伝達だけがある。もちろん、この賦にも独特な所がある。擬人化の手法で事物を詠じ、詠物と詠人を一つに融合させ、古代の棄婦〔捨てられた女性〕への同情を表している。温庭筠詩文の検索によると、陶淵明詩文の語句・典故・趣向を十箇所以上参考にしているが、ほとんどが散発的であり、大きな特色はない。その「錦鞋の賦」は陶淵明「閑情の賦」の受容において、最も特色ある一篇と言えよう。

当時の文壇における男女の情を描く艶麗の風と文人たちの放蕩で自堕落な生活様式を関連づけて見ると、段成式・温庭筠といった人たちが陶淵明の「閑情の賦」を鑑賞し、受容したのは偶然ではない²¹⁾。蕭統が「陶淵明集序」を書いた大通丁未の年(527)から温庭筠まで、現存する史料から見ると三百年余りの間、陶淵明「閑情の賦」の受容はほとんど空白である。晩唐の詩人たちはこの空白を埋め、さらに「閑情の賦」に対する受容の角度・評価の態度に新たな変化をもたらした。このことは、陶淵明受容史において重大な意味を有する。

陶淵明「閑情の賦」の情愛観は晩唐人の作品の内容、更には芸術の形式にも影響を及ぼした。上述した温庭筠「錦鞋の賦」の「願わくは芳趾に綢繆とし」云々は陶淵明の賦の情愛観の継承であり、構想・形式の模倣でもある。また、陸龜蒙(?-881)の「桃花塢」はもともと陶淵明の「桃花源の記」に依拠して作られたものである。その詩意について見ると、艶情は据え置かれ、真意だけが存在しており、安定した調和のとれた生存環境への憧れと、世を避けたいという心理が強く表れている。その形式から見れば、「願わくは此に流水と作り、潜ひそかに蕊ずい中の塵ちゆうを浮かべん」など三組の「願」字句の連用は、陶淵明「閑情の賦」の構想を借りたものである²²⁾。晩唐の読者が陶淵明の賦を熟知していたことが見て取れる。

宋代の読者も、陶淵明「閑情の賦」の形式と趣向に疎遠ではなかった。宋初の朱昂〔925-1007〕は「嘗て陶潜の「閑情の賦」を読み之を慕い」、陶淵明を学んで「広閑情の賦」を作った²³⁾。しかし、二つの賦の形式は似ているものの、内容は全く異なる。「朱昂の賦にも「十願」の構想があり、感情の表わし方は陶淵明の賦と変わらない。(中略)陶淵明の賦が歌

い上げたのは恋愛感情である。この賦では「將に方を姫孔〔周公旦と孔子〕と同じゅうし、迹を孫籧〔季孫行父と籧伯玉〕と抗せしめんとす」といい、古代の聖賢に対する思慕の情をうたいあげている。何事かを成し遂げ、後世に名を残すことを願っている²⁴⁾。結びでは「才を懐くも遇わず、天に順い命に安んず」という哲学的思考を吐露している。これは古い器を借りて新しい酒を入れ〔るように〕、独特な趣がある。この賦は陶淵明「閑情の賦」の受容史における最初の完備した模倣作であるが、ただ主題には転移が生じている。北宋末南宋初・蘇籧〔1091-?〕は「思古齋の詩卷に跋す」の中で「十願は独り僭に非ず、陶の云うところ那ぞ添うるを得ん」と述べる²⁵⁾。「閑情の賦」の十願は偽りがなく、誠実からなるものであり、後世が追加できる物はないと考えている。宋词は艶情を避けなため、受容者が「閑情の賦」の趣旨の真髓を会得することができた。例えば蘇軾の「南郷子・沈強輔愛上 犀麗玉を出して胡琴を作り、元素の朝に還るを送り、子野と同一各おの一首を賦す」は「願わくは龍香の双鳳の撥と作り、軽く攏えん。長に環児の白雪の胸に在らん」とうたう²⁶⁾。琴を賛えるものであっても、その内包された艶情は明らかに「閑情の賦」の妙趣を得ている。蘇軾がこの詞で言及した張先（字は子野）は、「閑情の賦」にも当然詳しくあった。張先〔990-1078〕の「訴衷情」詞は「此の時願わくは楊柳千糸と作り、春風に絆惹せん〔纏いつこう〕」とうたう²⁷⁾。蘇軾の詞の詠物という外見を取り外し、「閑情の賦」の「願わくは」という字句の趣向を借りて、直接男女の相思の情をうたっている。

唐宋の一般的な読者は「閑情の賦」を承認し、特別な愛好を示しさえしたが、蘇軾以前には蕭統に反駁した言論は見当たらない。蘇軾に至ってはじめて蕭統の軽蔑的な態度に明確に反対し、「閑情の賦」を肯定する言論を発表した。蘇軾は「文選に題す」の中で〔次のように〕言う。

舟中にて『文選』を読むに、恨むらくは其の編次法無く、去取〔取捨選択〕当を失す。(中略) 淵明の集を觀るに、喜ぶべき者甚だ多く、而るに独だ数首を取るのみ。以て知る其の余人忽として遺さる者甚だ多からんと。淵明の「閑情の賦」は正に所謂『国風』の「色を好むも淫ならず」にして、正使『周南』に及ばざるとも、屈宋〔屈原と宋玉〕の陳ぶる所と何ぞ異ならん。而るに〔蕭〕統乃ち之を譏る、此れ乃ち小児の強いて事を解するを作す者なり。元豊七年〔1084〕六月十一日書す。²⁸⁾

蘇軾はここで一つは『文選』に選ばれた陶淵明の作品が少な過ぎることに不満を抱き、二つは蕭統の「閑情の賦」に対する批判が不適切であることを明確に指摘している。蘇軾は「色を好むも淫ならず」によって「閑情の賦」を評し、〔それは伝統的な〕詩の教えに合致し、完全に肯定すべき作品であると考えている。陶淵明の「閑情の賦」は『詩経・国風』の

ように「色を好むも淫ならず」であるという蘇軾の評価は、前漢・司馬遷〔前145/135?-前87/86?〕が『詩経』を批評した言論に直接示唆を受けたものである。その本質的な内容は「毛詩序」の「情に発し、礼義に止まる」に由来する。更に一步を進めて言えば、「閑情の賦」は「変風」に似ており、「変風は情に発し、衰うると雖も未だ竭きず、是を以て猶お礼義に止まり」「止まる所無き者より賢なり」である²⁹⁾。これは「閑情の賦序」で述べられた「始め則ち蕩かすに思慮を以てし、而して終に閑正に帰す」と一致している。言い換えれば、蘇軾が「閑情の賦」の主旨を肯定したのは、陶淵明の創作の初心への一種の回帰である。蘇軾が陶淵明のために名を正すのは、おそらく単に他と異なる斬新な主張を揚げ『文選』を非難し排斥するためだけではなく、情と礼を共に重んじる彼の学術的主張および一貫した思想と緊密に関連しているのであろう³⁰⁾。

蘇軾の「閑情の賦」に対する肯定は、陶淵明受容史において先駆的な意義を有する。それ以来、「閑情の賦」を否定する声は明らかに弱まった。南宋の人々はその観点を受け継ぎ、普遍的に蕭統の批判に不満を抱き、完全に「閑情の賦」を肯定し、更なる解釈を行った。例えば釈惠洪〔1071-1128〕の「自詩に題し幻任庵に寄す」は「(淵明)「閑情の賦」を作り、以て其の真を見るに足る」とうたう³¹⁾。兪文豹〔生卒年未詳。淳祐年間の人〕は「淵明「閑情の賦」を作る。蓋し尤物能く人の情を移し、蕩げば則ち反し難し。故に之を防閑すと述べる³²⁾。葛勝仲〔1072-1144〕の「淵明の集の後に書す三首」其二は「変風」を「閑情の賦」にたとえ、「晋孝〔東晋の孝武帝〕末塗、酒色に沈湎す。何ぞ知らん上を諷刺するに非ざるをや」とうたう³³⁾。「以て其の真を見るに足る」にせよ、激しく揺れ動く感情を「防閑」するにせよ、はたまた「変風」の「変」を晋末の皇帝を「諷刺」することに具現化させるにせよ、これらの評価はいずれも蘇軾の肯定的な態度を継承するものである。彼らは文人の理想の高みから、「閑情の賦」に〔単なる〕艶情の描写を超える存在価値を見出したと言えよう。ただし「閑情の賦」の情愛〔表現〕についてはいつも言葉を濁し、曲解したのである。

しかし個人的な場では、宋人は必ずしも「閑情の賦」の情愛を楽しまないわけではなかった。例えば南宋・周紫芝〔1082-1155〕の『竹坡詩話』は、次のように述べている。

客に淵明の「閑情の賦」を誦する者有り。想うに、其れ此に於いて亦た自ら浅からずと。或るもの坐客に問う、「淵明に侍兒有りや否や」と。皆な対うる所を知らず。一人言う、之有り。其の何を以て知るかを問うに、曰く、「所謂「雍と端は年十三なるも、六と七とを識らず」〔陶淵明「子を責む」の詩句〕とは、此れ豈に侍兒有るに非ずや」と。是に於いて坐客皆な一笑を発す。³⁴⁾

これは冗談に近いが、私生活では、宋人は実際に陶淵明の情愛に対する態度を認めていたことが示されている。南宋・薛季宣〔1134-1173〕の「坊情の賦」は騷体〔『楚辞』の様式〕であるが、美人の美しさを極力描写し、情愛の魅力を述べ、最後に「礼教の楽しむべきを慨し、聊か歳を卒らうに優遊を以てせん」と述べる³⁵⁾。その構想・情思は「閑情の賦」と似ており、明らかに後者の模倣である。「この賦は薛季宣の美色に対する憧れ、及び礼儀を以て自制する態度を描写し、その（中略）理性で情を束縛しても情を捨てないという矛盾した心理状態をかなり具体的に反映している³⁶⁾」。このことは、宋代の一般の読者が「閑情の賦」の情愛に向き合う時の態度の反映と見なすこともできる。

蘇軾は「文選に題す」の中で陶淵明「閑情の賦」の中の「好色」な描写を屈原〔前343頃-前278頃〕の騷賦の中の香草・美人の描写と比較し、それによって陶淵明の賦のためにしかるべき地位を獲得した。それは単なる指摘にとどまり、詳しい解説はしていないものの、影響は同様に深遠である。その中でも、南宋・王観国〔生卒年未詳。政和の進士〕の『学林』巻七の解釈は、最も具体的で代表的なものである。

観国 此の賦を熟味するに、辞意 宛雅にして、己の不遇を傷み、情を願う所に寄せ、其の愛君憂国の心、惓惓として忘れず、蓋し文の雄麗なる者なり。此の賦 情を願う所の者に寄する毎に、「我朝に立たんと願うも、其の君之を用うる能わず」と曰うが若く、是れ真の譏諫する者なり。昭明〔蕭統〕責むるに諷諫無きを以てするは、則ち誤り。然らば則ち此の賦を読みて其の意を知らざる者、以て婦人を詠ずと為すや。古の美人・佳人を言うは、皆な以て君子・賢人に比ぶ。（中略）「閑情の賦」の寄意 遠し。以て微瑕と為す者は、其れ見て知らざるや。³⁷⁾

葛勝仲が国君の好色を風刺すると推測したのを継承し、王観国は政治的な視点から「愛君憂国」によって「閑情の賦」の主旨を説いた。論証豊かで奇想天外な議論と言えよう。王観国は屈原「離騷」の関連詩句によって香草・美人の伝統を明らかにし、「「閑情の賦」の寄意遠し」と結論づけた。王観国は『学林』で蕭統の「閑情の賦」に対する非難に反対し、陶淵明「閑情の賦」を忠君憂国の作品の系列に帰属させた。これも文人の理想の投影である。しかしその論をよく吟味するならば、〔それは〕蘇軾の肯定的態度と「屈宋の陳ぶる所と何ぞ異ならんや」という論断から発展して来たものである。

三、金元は、「閑情」は「処士の節」をそこなわず、とする

金代および元代の読者は「閑情の賦」を愛好し、否定的な意見はほとんど見当たらない。

「閑情」は陶淵明の風流で情愛豊かな一面を示しており、淵明の「処士〔隠者〕の節」をそこなわないと考えている。

金代の読者は「閑情の賦」の趣向に対し、好意的なからかいの中にユーモアに富んだ肯定を有する。党懐英〔1134-1211〕は清之和尚が「白楽天詩情の図」を描いた後に、「道人心無きも花に悩まされ、画に対し詩を作り真に適然たり。君見ずや元亮〔陶淵明〕名を蓮社の裏に投ずるも、更に閑情の篇を賦するを妨げざるを」と詩を書きつけた³⁸⁾。陶淵明が「閑情の賦」を書いたことによって、清之和尚が艶情図を描いたことを弁明しようとしている。その中には清之に対する好意的なからかいがあり、また作者の「閑情の賦」に対する寛容な態度が見て取れる。劉迎〔?-1180〕の「帰来図戯作」詩は「雲髻春風一尺高し、笑いて児女を携え帰櫂〔帰りの舟〕を候つ。情に知る一首の閑情の賦、合に微官の為に腰を折るに懶かるべし」とうたう³⁹⁾。前半二句において、劉迎は「帰来図」に見られる淵明夫人を描いた。「雲髻春風一尺高し」という誇張した筆致でその美しさを伝え、「笑」の一字で夫婦の仲睦まじさを想像させ、「閑情の賦」を導き出すための準備を整える。後半二句では「閑情の賦」によって陶淵明をからかい、「閑情の賦」と「微官」を比較し、「閑情の賦」の悠々自適で官職を愛せず、美人を愛する心情を肯定することを意図している。含蓄がありユーモラスで、特別な趣がある。

元代の読者は、陶淵明の「閑情の賦」受容にも独自の特色を有する。彼らは「閑情の賦」を通じて陶淵明の「有情」の一面を認識した。陶淵明が「閑情の賦」を書いたことは「その処士たるの節を害なわず」とし、節操高潔な人に対する評価を妨げないと考えている⁴⁰⁾。元人は男女の情愛に寛容であり、陶淵明の書いた情愛を忌み憚ることなく、直接肯定し、陶淵明の風流に必要な構成要素とさえ見なしている。王沂〔?-1362以後〕の「御街行・王君冕を送る二首」其一是、風流才子の王冕〔1310-1359〕のために書かれたもので、王冕の生活について「蘭を纫い佩を結び、氷を裁ち句を斫り、細かに和す閑情の賦」と想像している⁴¹⁾。陶淵明の「閑情の賦」は強烈な恋情を表わす典故として用いられた。この詞は男女の恋情に対し肯定的であり、「閑情の賦」中の情愛に対してももちろん肯定的である。白朴〔1226-1306以後〕は「石州慢・丙寅九日、楊翔卿を期するも至らず、懐いを書するに少陵〔杜甫〕の詩語を用う」で「白壁の微瑕、閑情を把りて拘束し難し」とうたう⁴²⁾。この「閑情」は掛け言葉であり、一方は蕭統の「閑情の賦」否定を認めないことを指し、もう一方は隠逸の心穏やかな心情を指している。馬致远〔1255-1321〕の小令〔仙呂〕「青哥兒・十二月」の「四月」は、さらに肯定的で直接的である。一首は惜春・傷春・恋春の濃厚な情緒を混ぜて男女の情愛を描いている。特に「留下す西楼美人の図、閑情の賦」の二句では情愛の感傷と熾烈さが暗に表れており、余韻の尽きない妙味がある⁴³⁾。楊維禎〔1296-1370〕の「統齋二十首序」と「君の出でしよりに擬す」には、いずれも陶淵明の「閑情の賦」を肯

定したり、手本としたりする語句がある。元人から見れば、陶淵明の風雅には情愛も含まれている。それゆえ、「孤高 閑情の賦に比ぶる莫し」と言うのである⁴⁴⁾。先人に比べ、これは元代の読者の寛容な所であり、後世の読者に残した新しい感覚でもある。

蘇軾・王観国などが儒家の倫理価値観を用い、曲げて解説することで「閑情の賦」を肯定したのと異なり、元代の読者は「閑情の賦」を肯定するために、もはやもっともらしい理屈を借りる必要はなかった。元人は、情愛は本より人生に付き物であり、「山妻〔隠者の妻〕」が〔存在することが〕隠者の自然な人情であると考えていた。だから元人の李治〔1192-1279〕は「閑情の一賦は以て淵明の寓する所を見るべきと 雖も、然れども昭明〔蕭統〕取らず。亦た未だ以て淵明の高致を損なうに足らず。東坡〔蘇軾〕昭明を以て強いて事を解すと為す。予 東坡を以て強いて事を生ずと為す」と述べ、蕭統と蘇軾を両成敗に処している⁴⁵⁾。この説は「閑情の賦」に「寓する所」があることは認めているが、この「寓する所」が「淵明の高致」に何かを付け足したとは考えていない。これはまさに蕭統が「取らざるも亦た未だ以て淵明の高致を損なうに足らず」と考えたのと同様である。蕭統と蘇軾の両方を否定した前提は、陶淵明がおのずから「高致」を有することで、「閑情の賦」が鍵となる要因ではなく、まして「寓する所」があることなどは、なおさら〔無関係〕である。元人の「閑情の賦」の情愛表現に対する寛容と肯定を関連づけて見れば、李治の意見はまったく偶然ではない。すなわち「閑情の賦」の情愛を認めてはじめて、諷諫の有無という付加的な意味が大した問題ではないと考えられるのである。清・田雯〔1635-1704〕は『古歛堂集雜著〕で「冶思艷態〔恋情と痴態〕」は高士の本性ではないが、兼ね備えることができると考えている。ゆえに「孰か謂う 掛冠高尚の人、便ち冶思艷態無きなり」と述べる⁴⁶⁾。これはすでに是非かを一概に論じる硬直的な見方から脱却したものであり、元代の読者の意見に対する応答である。

元代の読者が「閑情の賦」を肯定したのは、蘇軾が陶淵明を尊んで以来、蘇軾から強く影響を受けた元代の読者が陶淵明とその作品を愛していたこと以外に、主に二つの原因がある。

まず、それは元代の読者の品性と艶情を併せ持つ開放的な心情と密接に関係している。元代の市民文化と情趣は宋代の基礎の上に更に発展し、男女の恋情を忌み憚らず、男女の恋情を肯定する。このことは、元代の散曲と戯曲の中に特にはっきり現れている。楊維禎らは伝統的な觀念の影響を受けず、艶麗な詩体と見なされる「奩体詩」を大量に創作し、果たして「万口の播伝するところと為る」に至る⁴⁷⁾。元代の開放的な気風の一端を見て取ることができよう。品性だけを肯定し、艶情を否定した「方幅の士〔四角四面の堅物〕」と違い、楊維禎は「鉄石の心」の持ち主ではあるが、生活の中では放浪の名士でもあった。彼の嗜好は「履物杯〔女性の靴を杯にして酒を飲む〕」のように「閑情の賦」の枠を遥かに越えるもので

あった⁴⁸⁾。陶淵明は「閑情の賦」において、美人に対して「徒らに勤しみ思いて以て自ら^{みづか}悲しみ、^{つひ}終に山に阻まれ河に^{はば}滞る」であり、最終的にはただ「万慮を^{うちあ}坦けて以て誠を存し、遥情を八遐に^{いこ}翹わしめん」という闊達さにとどまっただけである⁴⁹⁾。一方、楊維禎は声妓を好み、〔女性に対する〕審美もあれば具体的な行動もあったため、「閑情の賦」に書かれていることは、おのずと大したことではなかった。艶情が公序良俗を害するという非難も、何でもなかった。艶情の受容と名教に束縛されない開放的な心理は、元人に陶淵明の「閑情の賦」を理解させ、受容させたといえよう。宋人の「色を好むも淫ならず」という評価に比べると、元代の読者はすでに礼教をこえ、大きく一步を踏み出していた。彼らは陶淵明の「閑情」をもはや恥じることなく、「名教」の観念を借りて隠者のためにぼろ隠しをすることもない。かえて、この「閑情」は隠者の品格の高さをそこなわないと考え、情愛と人文の理想の両面から「閑情の賦」の意義を肯定したのである。

次に、元代の読者が陶淵明「閑情の賦」の「有情」の一面を肯定したのは、隠士の伝統に女性を重視する面があったことと関係がある。陶淵明の詩文の中には、わざわざ^{けんろう}黔婁〔古代の隠者〕の妻の名言〔「貧賤に^{せきせき}戚戚たらず、富貴に^{ききゅう}汲汲たらず」〕が引用されている〔「^ご五柳先生伝」賛〕。後世の人々が隠逸の心情を表す時にも、「山妻」の人間像は殊の外重んじられた。これは、元人の隠逸を主題とした散曲においては、なおさらである。家に良妻がいることは世間一般の理想であるだけでなく、隠者の伝統であり理想でもある。元代の士人の多くは理想と審美の中で政界における栄達や功名・富貴を否定し、人生の価値を田園における隠逸と人倫の楽しみに移した。夫婦は人倫の重要な一部であるため、隠逸生活を推賞していた元代の読者が隠逸生活あるいは陶淵明に「山妻」を附したことは、容易に理解されよう。

四、明清における読解の儒教化

宋代の蘇軾^{しゆき}、朱熹〔1130-1200〕などの称揚を経て、陶淵明とその詩文は文化と文学史における崇高な地位がすでに確立されて来た。彼らは「淵明は高簡閑靖にして、晋宋第一輩の人たり⁵⁰⁾」「陶公は千載に一人なり。(中略) 自ら日月と光を争う者なり⁵¹⁾」「陶公は三代よりして下に第一流の人物たり、其の詩文は自ら^{おのずか}両漢以還の第一等の作家たり⁵²⁾」などと考えている。陶淵明の人格と作品はさらに尊崇され、すでに士人の偶像の一つとなった。明代復古派の何景明〔1483-1521〕らは、かつて陶淵明を二流作家の列に入れようとしたが、このような論調を提示するとすぐさま^{こうしやうそう}黄省曾〔1490-1540〕らの強力な反論に遭い、結局多くの読者の賛同を得ることはできなかった。広く認められたのは、陶淵明が一流の大家であり、清代にはさらに「詞林の独歩」と尊称され⁵³⁾、杜甫などと並んで「詩聖」と呼ば

れ⁵⁴、「仏様のように尊い地位」に達した詩人だということである⁵⁵。このような受容の気運において、陶淵明の「閑情の賦」は基本的に肯定され高く評価されていたが、理学に制限されたため、多くは儒家の政治道徳の立場から解釈を施されたものである。

「閑情の賦」読解の儒教化は、明代の読者の独特な解釈の傾向であり、それはおもに政教化と道学化の両方に表れている。

明人の政教的解説は陶淵明の賦の序の「諷諫に助け有り」と蘇軾の「色を好むも淫ならず」という観点を継承したものである。たとえば張自烈〔1597-1673〕は「淵明の序を觀るに云う、「諒に諷諫に助け有り」「庶わくは作者の意を謬らざらんことを」と。此の二語頗る己が志を示す」と述べる⁵⁶。陸時中〔生卒年未詳〕は「閑情の賦」を具体的に分析し、「始め淑女の美を叙べ、而して「膝を接し以て言を交わさんと欲す」と云うは、明主を得て之に事えんと欲するなり。(中略)末に「淑女終に見るを得ず、俯仰徘徊するも聊か頼る無し」云々と叙ぶるは、是れ盛明値い難く、歲月暮れ易くして、忠を獻じるに路無きを悲しむなり。結びに「万慮を坦けて以て誠を存し、遙情を八遐に憩わしめん」と云うは、則ち命に安んずるのみ。嗚呼、一篇の風旨を味わうに(中略)明らかに諷諫たり」と述べる⁵⁷。これは陶淵明の「諷諫に助け有り」説に回帰し、具体的に提示したものである。王嗣奭〔1566-1648〕の『夷困文編』巻六は「人情は色を好み情は蕩き易し、而るに之を節するに礼を以てし、聖賢も此の如きに過ぎず。元亮〔陶淵明〕の「閑情の賦」は寓意の在る有り、「唐を采る」(『詩経』鄘風「桑中」)・「麻を漚す」(『詩経』陳風「東門之池」)の倫〔仲間、同類〕に非ず〔単に男女の情愛を赤裸々にうたうだけの作品ではない〕。即ち文にしたがいて解を作さば、則ち云う所の「自ら往きて誓いを結ばんと欲するも、礼を冒すの愆ちたるを惧る」なり。此れ便ち是れ色を好むも淫ならず、風雅に愧ずる無し」と述べる⁵⁸。これは蘇軾の「色を好むも淫ならず」説に回帰し、ただより具体的な論析を加えただけである。

道学的解釈は、陶淵明の人格を宣揚したことによるものである。例えば孫慎行〔1565-1636〕は好色を言志の道に託し、「閑情の賦」について「「閑情」の一賦は、淵明蓋し道を志すなり。其の悠悠として寤想し、展転すること切至なるは、即ち顔子〔顔回〕の〔孔子を〕仰鑽し瞻忽して疲れを為さざるなり」と解釈し、陶淵明の賦は儒家の道を追求するものであると明言している⁵⁹。これは清代にも呼応があった。例えば劉光蕡〔1843-1903〕は「陶淵明閑情賦注」を著し、「閑情の賦」は「悟道の作」とであると指摘している⁶⁰。

「閑情の賦」の趣旨については、清代の読者による参考にすべき評論や言論が前代に比べ最も豊富であり、その論争も多種多様である。主に「故国に忠誠」説、「終に閑正に帰す」説、「大雅を傷なう有り」説などがあり、いずれも儒教の立場に回帰する特徴が表れている。

「故国に忠誠」説は主として蘇軾・王観国の「香草・美人」説を遠く継承するものである。

陸 棊〔1630-1699〕は「閑情の賦」を「当に「洛神」思君の作と並べ伝うべし」とした⁶¹⁾。
 陳廷焯〔1853-1892〕の『白雨齋詞話』は「淵明名臣の後なるを以て、易代〔王朝交代〕
 の時に際し、言わんと欲するも言い難く、時時に寄託す。「閑情」と云うは、其の情を閑に
 し、逸するを得ざらしむるなり。是を以て諸願を歴写し、而して終に願う所を以て必ず違
 う。其の劉宋に仕えざるの心、言外に見るべし」と述べる⁶²⁾。陳作霖〔1837-1920〕の「陶
 靖節の「閑情の賦」の後に書す」は、この賦について「美人を借りて以て意を写し、居然と
 して屈子〔屈原〕の「離騷」なり。故国を懐いて忘れず、尚お義熙〔東晋の年号。405-
 418〕の甲子を記す」と述べる⁶³⁾。要するに、方濬頤〔1815-1889〕が述べたように、「諸を
 寓言に託し、以て其の懐抱を写すに非ざる無く、華にして靡〔淫靡〕ならず、莊にして佻
 〔輕佻〕ならず」である⁶⁴⁾。「閑情の賦」に深く秘められているのは「易代の時、言わんと欲
 するも言い難き」「故国」の思いであり、それは「離騷」の香草・美人の伝統の流れを継承
 する「風人」の作であり、比喻による寄託の作だと言うのである。

「終に閑正に帰す」説は、陶淵明「閑情の賦序」に基づき、蘇軾の観点を継承し発展させ
 たものである。閻若璩〔1636-1704〕は蘇軾が〔「閑情の賦」を〕『詩經・国風』の「色を好
 むも淫せず」にたとえた説に賛成し、「閑情の賦」を「終に閑正に帰す」とし、辞賦の「曲
 終わりて雅を奏す」の趣旨に合致すると考えている⁶⁵⁾。孫人龍〔生卒年未詳。雍正の進士〕
 は「古は美人を以て君子に比し、公も亦た猶お此の旨のごとくなるのみ。(中略)意は
 「風〔国風〕」「騷〔離騷〕」を本とし、自ら極めて高雅にして、所謂「情に発し、礼儀に止
 まる」者なり」と考えている⁶⁶⁾。胡光伯〔生卒年未詳。道光年間の人〕は「閑情の賦」につ
 いて「閑は閑なり、門中に木有るに従う。『易』に曰く、「邪を閑にし其の誠を存す」と。陶
 淵明の「閑情の賦」は其の情欲を閑止するを謂うなり」と論じている⁶⁷⁾。これは〔賦の〕本
 文と文化に回帰した論であり、原作の実質を把握できている。「終に閑正に帰す」説と「故
 国に忠誠」説は決して矛盾せず、いずれもこの賦が雅正に帰することを肯定している。ただ
 前者は比較的幅広く解説しており、後者が政治のみに固執する点が異なるだけである。

「閑情の賦」を否定する者は依然として蕭統の意見を遠く継承し、「大雅を損なう」という
 説を堅持している。明・田汝成〔1503-1557〕の「重刻文選序」は「夫の閑情の一賦の若き
 は、明らかに白璧の微瑕たり。蓋し処士興寄沖寂〔奥深く静か〕なれば、当に艶詞を学
 歩せざるべし。百を勧め一を諷し、自ら平生に歿く。淵明の故を以て、概ね奨して佳と
 為すが若きは、是れ夏后氏の璜〔宝玉〕を宝とし、其の考〔斑点〕を忘るるなり」と述
 べる⁶⁸⁾。清・方東樹〔1772-1851〕は「昔人謂う、正人は宜しく艶詩を作らざるべしと。此の
 説甚だ正しく、賀裳〔生卒年未詳。明末清初の人〕之を駁するは非なり。淵明の「閑情の
 賦」の如きは、以て作らざるべし。後世之に循い、直ちに是れ輕薄淫褻にして、最も子弟
 を誤る」と考えている⁶⁹⁾。王闈運〔1833-1916〕の態度はさらに鮮明で、「閑情の賦」につい

て「十願は大雅を傷なう有り、微瑕に止まらず」と直接指摘している⁷⁰)。彼らは厳正な礼教の立場から、狭隘な古い道徳観念で「閑情の賦」の真情を否定している。

この他、清代のある読者は一説のみを主張せず、比較的寛容で総合的な意見をとる。劉光蕢〔1843-1903〕は「閑情の賦」について「其の賦する所の詞は、以て学人の求道と為すも可、以て忠臣の主を恋うると為すも可、即ち以て自ら身世を悲しみ以て聖帝明王を思うと為すも亦た可ならざる無し」と指摘している⁷¹)。清・呉覲文〔生卒年未詳。乾隆以前の人〕の「批校陶淵明集・陶淵明集序」の批語は左右どちらか一方にのみ与せず、一面では「閑情の賦」が「終に閑正に帰す」「諷諫に助け有り」と肯定し、蕭統の否定的な意見に同意しない。しかし別の一面ではまた「昭明〔蕭統〕の「閑情の賦」を論ずるは則ち過当たり。而るに其の「卒に諷諫無ければ、何ぞ必ずしも其の筆端を揺るがさん」と言う二語は、要するに「自ら作文の正論たるなり」とも述べている⁷²)。このような包括的な評論は、一面では読者が「閑情の賦」の主旨を理解しようとする際に従うべき〔絶対的な〕解釈がなかったことを示し、別の一面では「閑情の賦」のテキスト自体に巨大な閲読の空白があり、読解の多面的な可能性があることを示している。

五、余論

歴代の読者は、創作の面において「閑情の賦」を学ぶことへの興味を示した。模擬作として今日確認できるものには、宋・朱昂の「広閑情の賦」、薛季宣の「坊情の賦」の他、明清時代には少なくとも次の数篇がある。すなわち元末明初・梵琦〔1296-1370〕の「正情の賦」、明・正徳年間〔1506-1521〕の李濂〔1488-1566〕の「理情の賦」、嘉靖年間〔1522-1566〕の謝承祐〔1518?-?〕の「閑情の賦に和す」、晚明・周履靖〔1549-1640〕の「(陶の)閑情の賦(に和す)」、清・李遇春〔生卒年未詳〕の「閑情の賦」、晚清・楊浚〔1830-1890〕の「陶靖節の閑情の賦に擬す」、楊銳〔1857-1898〕の「陶淵明の閑情の賦に擬す」などである。これらの作品は、理性的な悟りを書いたり、隠逸を書いたり、情愛を書いたりして、大変特色がある。

詩文の創作において、作家は常に詠物・情景描写あるいは人物描写の際に、巧みに「閑情の賦」の趣向を用い、愛好の心情を表現している。唐宋金元は既述の通りであり、明清二代にも時折そのような作が見える。たとえば明・焦竑〔1540-1620〕の「陳子野の為に作る三首・五柳亭⁷³)」、袁中道〔1570-1626〕の「艷歌⁷⁴)」、清・尤侗〔1618-1704〕の「袴⁷⁵)」、吳承勳〔生卒年未詳。道光年間の人〕の「鷓鴣天・虎丘道中⁷⁶)」、錢棻〔生卒年未詳。崇禎の拳人〕の「秦樓月・郊園詞家爾斐に和す十八首」其十六「東籬⁷⁷)」、孫枝蔚〔1620-1687〕の「鷓鴣天(小史席上に於いて袖中の鷓鴣を出し戯弄して已まず、季希韓命じて詞を作り

これ
之に贈らしむ⁷⁸⁾」、曹爾堪^{そうじかん}〔1617-1679〕の「風入松^{ふうにゅうしょう}」⁷⁹⁾」、譚猷^{たんけん}〔1832-1901〕の「蝶恋花^{ちょうれんか}」
(庭院深深人悄悄)⁸⁰⁾」、邵無恙^{じょうむよう}〔生卒年未詳。乾隆の挙人〕の「呉生に贈る^{ごういんしょう}」⁸¹⁾」、洪允祥
〔1874-1933〕の「無題⁸²⁾」などである。これらは句式・意匠・情趣を陶淵明の賦から取った
上で、往々にして新しい意味を加えることができている。

歴代の読者の「閑情の賦」に関する理性的解釈を概観すると、いずれも道徳と政治に束縛
されている〔ことがわかる〕。通達な者はあるいは悟道の作に昇華させ、あるいは艶情を
「情に発し、礼義に止まる」とするが、その共通の受容基盤は、主に伝統的農業社会の基礎
の上に築かれた儒教文化の価値観である。形而上的な意味では、伝統文化に規定された男女
の情愛は読者の「閑情の賦」の読解の範囲と高度を制限した。つまり、一般的に政治・倫理
と男女の分け隔て以外に、肯定に値する理由を見出すことができなかつた。かえって形而下
の文学創作の受容において、読者の「閑情の賦」に対する感情と趣味は、尽きせぬ興味と基
本的な愛玩の態度を保って来た。しかし、このような態度には限界がある。すなわち基本的
には男性目線の賞玩的な態度に限定され、賦の〔作者の〕女性に対する痴情めいてはいるが
〔相手を〕尊重している態度が軽視されている。これは伝統的な価値観に制約されていた古
代の読者と「閑情の賦」の間に隔たりがあったことを示しており、その歴史的限界は明らか
である。この問題の解決は、近現代の情愛観を備えた新たな読者、例えば魯迅^{ろじん}〔1881-
1936〕・周作人^{しゅうさくじん}〔1885-1967〕などの出現を待たねばならない⁸³⁾。近代の社会形態による近
代的な性愛観の伝播と普及を待たねばならない。その文人の理想の意味についても、道徳・
政治をこえて、人間性・哲理などの角度からより一層掘り下げた読解がなされることを待た
ねばならない。

注〔ただし通し番号に変更した〕

- 1) 鍾優民『陶学発展史』・高建新『自然之子陶淵明』の関連部分などに簡単な紹介がある。
- 2) 陳文忠『中国古典詩歌接受史研究』64頁。安徽大学出版社、1998年。
- 3) ヤウス「文学史作為向文学理論的挑戰」。『接受美学与接受理論』25頁。遼寧人民出版社、1987年。
- 4) 遼欽立校注『陶淵明集』9頁。中華書局、1979年。
- 5) 橋川時雄『陶集版本源流考』4頁。文字同盟社、1931年。
- 6) 姚思廉『梁書』167頁。中華書局、1973年。
- 7) 曹道衡・傅剛『蕭統評伝』78頁。南京大学出版社、2001年。
- 8) 前出『蕭統評伝』81頁。
- 9) 前出『梁書』168頁。
- 10) 郭子章『豫章詩話』巻1。胡思敬輯『豫章叢書』第216冊。南昌古籍書店・杭州古籍書店、1985年。

- 11) 司空図著、祖保泉・陶礼天箋校『司空表聖詩文集箋校』140頁。安徽大学出版社，2002年。
- 12) 鐘惺・譚元春選評『唐詩歸』卷2。中国基本古籍庫収録の明刻影像本。
- 13) 彭定求等編『全唐詩』卷891，10059頁。中華書局，1960年。
- 14) 前出『全唐詩』卷475，5398頁。
- 15) 前出『全唐詩』卷584，6769頁。
- 16) 前出『全唐詩』卷635，7293頁。
- 17) 注16)に同じ。
- 18) 注15)に同じ。
- 19) 前出『陶淵明集』155頁。
- 20) 温庭筠著、曾益等箋注『温飛卿詩集淺注』232頁。上海古籍出版社，1980年。
- 21) 李劍鋒『陶淵明接受通史』185-186頁。齊魯書社，2020年。
- 22) 前出『全唐詩』卷618，7121頁。
- 23) 脱脱等『宋史』卷439「朱昂伝」。影印清乾隆〔1736-1795〕武英殿刻本。
- 24) 趙達夫編『歷代賦評注6』（宋金元卷）14頁。巴蜀書社，2010年。
- 25) 蘇籀『双溪集』卷1。清『文淵閣四庫全書』影印本。
- 26) 蘇軾『東坡詞』卷1。明崇禎〔1628-1644〕刻宋名家詞本。
- 27) 張先『張子野詞』卷2。中国基本古籍庫収録の鮑廷博輯『清知不足齋叢書』影像本。
- 28) 蘇軾著、孔凡礼点校『蘇軾文集』第5冊，2092-2093頁。中華書局，1986年。
- 29) 同上第1冊，318頁。
- 30) 前出『陶淵明接受通史』265-266頁。
- 31) 釈惠洪『石門文字禪』卷26。清『文淵閣四庫全書』影印本。
- 32) 俞文豹『吹劍録外集』「範文正公」条。中国基本古籍庫収録の鮑廷博輯『清知不足齋叢書』影像本。
- 33) 葛勝仲『丹陽集』卷8。清『文淵閣四庫全書』影印本。
- 34) 何文煥『歷代詩話』上冊，340頁。中華書局，1981年。
- 35) 薛季宣著、張良權点校『薛季宣集』12頁。上海社会科学院出版社，2003年。
- 36) 蔣凡・劉明今『中国文学批評通史——宋金元卷』809頁。上海古籍出版社，1996年。
- 37) 王觀国撰、田瑞娟点校『学林』225-226頁。中華書局，1988年。
- 38) 薛兆瑞・郭明志編『全金詩』第1冊，508頁。南開大学出版社，1995年。
- 39) 前出『全金詩』第2冊，258頁。
- 40) 顧嗣立編『元詩選』初集下，2007頁。中華書局，1987年。
- 41) 唐圭璋編『全金元詞』下冊，834頁。中華書局，1979年。
- 42) 白朴『天籟集』卷下。清覆元抄本。
- 43) 隋樹森編『全元散曲』上冊，231頁。中華書局，1981年。
- 44) 唐元「淵明菊」。程敏政編『唐氏三先生集・筠軒詩稿』卷7。明正徳十三年〔1518〕刻本。
- 45) 李治『敬齋古今艱』。王云五主編『叢書集成初編』88頁。中華書局，1985年。
- 46) 郭紹虞・富寿蓀編『清詩話統編』上冊，卷3，718頁。上海古籍出版社，1983年。
- 47) 前出『元詩選』初集下，2008頁。
- 48) 前出『元詩選』初集下，2009頁。

- 49) 前出『陶淵明集』156頁。
- 50) 郭良翰輯『問奇類林』卷13「恬退」。明万曆二十七年〔1599〕黃吉士等刻增修本。
- 51) 傅占衡「和陶飲酒詩序」。楊訥・李曉明編『文淵閣四庫全書補遺』明代卷『明文海』478頁。北京図書館出版社，2005年。
- 52) 北京師範大学，北京大學中文系編『陶淵明資料彙編』上冊，146頁。中華書局，1962年。
- 53) 前出『陶淵明資料彙編』上冊，149頁。
- 54) 潘德輿著，朱德慈点校『養一齋詩話』卷3，第22条，48頁。中華書局，2010年。
- 55) 劉宝書『詩家位業図』1卷，清光緒十八年（1892）張善音刻本。蔣寅『清詩話考』624-625頁参照。中華書局，2005年。
- 56) 前出『陶淵明資料彙編』下冊，323頁。
- 57) 陸時中「書陶彭沢閑情賦後」。董斯張輯『吳興芸文補』卷二十三。明崇禎六年〔1633〕刻本。
- 58) 王嗣爽『夷困文編』。上海書店出版社編『叢書集成統編』第120冊，528頁。上海書店出版社，1994年。
- 59) 孫慎行「桃花源」。『玄晏齋集・玄晏齋文抄』卷三。明崇禎〔1628-1644〕刻本。
- 60) 前出『陶淵明資料彙編』下冊，325頁。
- 61) 陸柔『歷朝賦格』中集・騷賦格卷4。清康熙間〔1662-1722〕刻本。
- 62) 陳廷焯『白雨齋詞話足本校注』卷7，541頁。齊魯書社，1983年。
- 63) 陳作霖『可園文存』卷7。清宣統元年〔1909〕刻增修本。
- 64) 方濬頤『陶淵明白璧微瑕辯』。『二知軒文存』卷11。清光緒四年〔1878〕刻本。
- 65) 閻若璩『潜邱札記』卷6。清『文淵閣四庫全書』影印本。
- 66) 前出『陶淵明資料彙編』下冊，324頁。
- 67) 鄧顯鶴編『沅湘耆旧集前編』卷17収録の朱昂「送新知永州陳秘丞瞻赴任」一首の按語から引用。清道光二十四年〔1844〕鄧氏小九華山樓刻本。
- 68) 田汝成『田叔禾小集』卷1。『叢書集成統編』第116冊，237頁。上海書店出版社，1994年。
- 69) 方東樹『昭昧詹言』卷21，第39条，482頁。人民文学出版社，1961年。
- 70) 王闈運『湘綺樓日記』3086頁。岳麓書社，1997年。
- 71) 前出『陶淵明資料彙編』下冊，325頁。
- 72) 前出『陶淵明資料彙編』下冊，326頁。
- 73) 焦竑『焦氏澹園集』卷45「陶靖節先生集序」。明万曆三十四年〔1606〕刻本。
- 74) 袁中道『艷詩』。『珂雪齋集』前集卷2。明万曆四十六年〔1618〕刻本。
- 75) 尤侗『西堂詩集・看雲草堂集』卷4。清康熙刻本。
- 76) 黃燮清『国朝詞綜統編』卷19。清同治十二年〔1873〕刻本。
- 77) 錢棻『蕭林初集』卷4。明崇禎〔1628-1644〕刻本。
- 78) 孫枝蔚『漑堂集・詩余』卷1。清・康熙〔1662-1722〕刻本。
- 79) 鄒祇謨・王士禛輯『倚声初集』卷13。清順治十七年〔1660〕刻本。
- 80) 譚獻『復堂詞』卷1。清同治〔1862-1874〕刻復堂類集本。
- 81) 邵無恙『鏡西閣詩選』卷3。田建民『詩興智慧 錢鍾書作品風格論』155頁。河北教育出版社，1997年。
- 82) 洪允祥著，吳鉄佶点校『悲華經舍詩存』88頁。浙江古籍出版社，2011年。

- 83) 魯迅は「閑情の賦」を「堅実で趣のある作品」と考えている（魯迅「致日本友人増田涉的信」。『魯迅書簡』16頁。陝西人民出版社，1973年）。周作人は蕭統の「閑情の賦」に対する批判について「大いに情趣に欠ける」と考えている（周作人著，止庵編『周作人自編文集』所収『葉味集』12頁。河北教育出版社，2002年）。二人とも近代的な情愛の意義において「閑情の賦」を肯定した。この後、「閑情の賦」を肯定する読解はさまざまでも、ほとんどが男女の情愛の肯定に基づいて行われている。

附記

本稿は2025年度唐山師範学院科学研究プロジェクト（課題番号：20251123106）による研究成果の一部である。